

# 鶴山書院報

公益財団法人孔子の里会報  
「鶴山書院報」第二号に寄せて

## 学問の志を「今」に繋ぐ恩人



理事長 横尾 俊彦

明治維新百五十年は来年です。その原動力は人材力でした。それには新規開拓に勤しむ人物育成が不可欠です。

世直し改革実践活動の御縁から、元三重県知事で早稲田大学大学院名誉教授の北川正恭先生を多久聖廟にご案内しました。マニフェスト政治導入に寄与された方としても知られ、世直しのこだわりを持って奔走されています。

聖廟ではまさに食い入るように凝視され、細部にわたり視察されました。聖龕の雲を描いた部分についても、「創建当時はさぞ鮮やかな極彩色で、人々は驚嘆したことでしょう」と見つめられ、孔子像の表面に金箔が施されていたであろうことも紹介すると、さらに目を凝らしてご覧になっていました。

ここ多久の地にかくも素晴らしい孔子廟があること、思いを込め創建した領主がいて、それを重んじる人々が続き、三百年超を越え継承されてきたことの意義を改めて感じる機会でした。貴重な創建の志と実行だといえます。

さらに北川先生は、聖廟に至る聖堂小路にも

感心されたのでした。「秋田の角館にある武家屋敷群の小路にも匹敵する佇まいで、意義深い。この歴史の宝をもっと磨いて発信してみたい」と講演でも述べられました。

わたしたちは今を生きています。自分だけの力ではなく、陰に陽に支える多くの力を享受しながら「今」を生きる機会に恵まれています。「今」の連続が歴史になり、創造の基礎にもなっています。それは、「今」という時に注がれる思いの深さ、努力の強さ、祈りの厚みがあつてこそでありましょう。

まして、人々の関心が薄い時、経済的に困窮して寄進も保護も叶わぬ窮状に陥った時、どのように歴史を守り、聖廟を守るかは、その時々「今」を生きる人々に委ねられます。身体を張って聖廟と歴史を守ると決意し、物心ともに努力を積み上げた先人のお蔭で私たちは今、多久聖廟を見ています。

そんな恩人こそが大塚廟山（巳一）先生です（詳細は四頁以降）。郷土資料館の廟山文庫にある古文書はかつて教科書、研究書として学徒に親しまれたものです。その累積も比類なきものです。大塚先生の辞世の句に「たとえ逝去して身は滅しても、我が魂はここにあって浮遊し、常に学問とともにある」の旨が記されています。だからこそ廟山文庫は開架式書庫になっています。

じつはこの空間、市長室にしたい、このような空間の中で瞑想し、構想し、執務したいものだ、ここに来るたびに思う嘉悦の空間でもあります。

### 第2号

公益財団法人  
孔子の里

〒846-0031  
佐賀県多久市多久町  
1843番地3 東原庫舎内  
TEL 0952-75-5112  
FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp  
URL <http://www.ko-sinosato.com>

発行人  
理事長 横尾 俊彦

## 第1回 多久百景写真コンテスト表彰式

グランプリ

表彰式については9ページをご覧ください。

準グランプリ



夏めく幡船の里



炭鉱遺産

# 「附驥日録 東へ」

## 草場佩川と石丸龜峰、 九思堂の病床にて

草場佩川の会副会長 尾形 恵子

昨年から月に一度ほど佩川著作の読み合わせを試みている。草場佩川の会長である桑原峰俊さんの声かけによるもので、その最初の作品は「附驥日録東」であった。三好嘉子先生によって翻刻されている作品であり、一見するとおおよその内容は掴めそうなのだが、全体を通して丁寧に読んでいくという地道な作業は、仲間を得て始めて取り組むことができるのかもしれない。

文化八年(一八一二)朝鮮通信使の接待のために対馬に赴く古賀精里に随行することになった佩川は、いったん江戸に上って一向に合流する。「附驥日録 東」によれば、佩川の対馬随行はかなり早い段階で決まっていた。通信使との会見が来春と定まると、古賀精里は当時佐賀にいた佩川に「先に行つて待つように」促している。しかし佩川は先に発つことをせず、あえて江戸に上った。「驥に附いて行く」それは対馬行に臨む佩川の決意だった。「驥」というのは一日に千里を走るといわれる伝説の馬のこと、古賀精里という「驥」の頭がまだ江戸にあるのに、尻尾にも劣る自分が先に行くなどありえなかつたのである。こうして始まった「附驥日録 東」の冒頭には、出発に至るまでのさまざまな心の葛藤が綴られていた。また日本文は極めて簡潔な心覚え

風だが、私的な色彩を濃く残し、ひとつひとつの事柄にその背景が推察されるようで、興味のつきないものだった。

旅立ちの日、椋之瀬橋の手前で聖廟の森を仰ぎ、ついで大古場の先祖の墓を拝する。友人、知人に見送られて橋を渡ると、喜びと悲しみの感情が一気に押し寄せてきた。なんとか心をなだめ平静を装って佐賀へ急ぐが、たちまちのうちに日が暮れてしまうという描写で、心中の不安を露呈させてみせる。佐賀では主君茂鄰から盃を頂き、古賀穀堂をはじめとする弘道館の先生たちを訪ね、仲間とも別れを惜しむ。その佐賀で最後に挨拶に向かったのが石丸龜峰である。

「過九思堂、謁龜峰石先生、時先生病在蓐、垂論醇々」

それは思いもかけない名前であった。石丸龜峰は佩川が生まれる前に佐賀弘道館に招かれ、のちに教授に進んだとされているが、その足跡はほとんど知られていない。九思堂、つまりこれが石丸龜峰の塾、または教室ということである。龜峰は病の床にあり、臥せたままである、郷里の若者が今まさに学問で世に出ようとしている、その道の先達ゆえの懸念であろうか、病床でひとつひとつ佩川をさとす石丸龜峰。この事実によって私は初めて石丸龜峰という郷土の先人の存在を実感することが出来た。

寛政元年五月弘道館東隣屋敷学館境内トナシ此所ニ少年の通学所一ヶ所建増ニナル九思堂と号ス。此新境内工教職ノ内一人居住有之始ハ家塾ノ姿ニテ生徒取立有之…… (弘道館沿革より抜粋)

九思堂は弘道館の一隅に設けられた少年たちの学

問所であり、おそらく石丸龜峰はそこで生涯を教育に捧げたのであろう。その理念は「君子の九思」にのぶことができる。

孔子曰く君子に九思有り、視るには明を思い、聴くには聡を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は恵を思い、疑いには問うを思い、忿には難を思い、得るを見ては義を思う。

「論語 李氏第十六」

「旧多久邑人物小誌」では石丸龜峰のことを「鶴山、龜峰と並び称される山郷の光輝」と讃えている。そのふるさと多久の学問の景色に「佩川」という美しい流れが加わったことを見定めて、文化九年、石丸龜峰は世を去った。

# 草場佩川の蔵書 からみる興味・関心

公益財団法人

孔子の里  
事務局長

江口 正晃

「本棚は人格を表す」という格言をどこかで聞いたことがある。本棚からはその人の、興味、関心、研究分野等が表れると思う。

今回は、多久の儒学者であり、文化人でもあった草場佩川が自身で記録している新蔵書目と画本の目録を分析し、彼の知的な興味・関心・研究分野はどのような分野であったのだろうかを探りたい。

まず、新蔵書目と画本の記録の記載形式について

説明する。すべての記録を掲載したいが、ここでは、一部紹介する。基本的な記載形式としては、次のような形式で六十七作品の題名が記録されている。

- 小学句解 十 貸往円城寺
- 易学啓蒙 二 癸酉
- 大学新疎 二 庚申

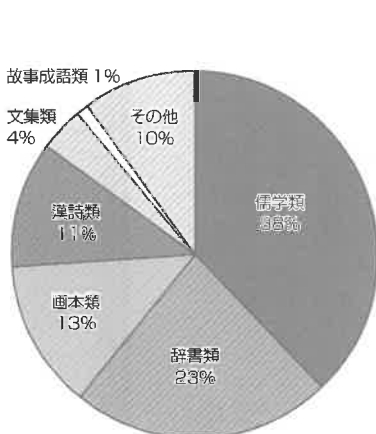
先頭に「○」又は「●」、「△」「◎」などがあり、書籍の題名、冊数、干支または元号（寛政のみ）と備考として一部入手先や貸し借りの記録が基本の形式であるが、冊数や干支が記載されていないものも多数ある。干支と元号は、おそらく入手した年が記されていると考えられ、唯一元号で書かれた「寛政」は、佩川が十四歳で終わるので、昔の記憶で曖昧なため「寛政」と記したのではと考えられる。干支を元号と西暦に表すと寛政期（一七八九—一八〇〇年）から文政二（一八一九）年までとなり、佩川の少年時代（寛政は佩川三歳から十四歳まで）から三十三歳までの蔵書二百六十八冊の書物の記録と考える。

蔵書の分類を冊数別で行うとグラフ①のような割合になる。儒学類と辞書類が全体の半分以上を占めており、特に多いのが儒学類の『五経集注』の五十八冊や辞書類の『康熙字典』の四十二冊などがある。これらは東原彦舎や弘道館の教育者として研究や調査に必要な書物であり、各セットで冊数が多いため、このように充実していたと考えられる。しかし、これを作品数（題名数）でみるとグラフ②のようになる。この結果から画本類と漢詩類の種類が作品数は充実している。このことから絵画や漢詩については、様々な作品の書籍を集め、関心が高かったといえる。冊数と作品数から考えると儒学・辞書類の冊数の多さから東原彦舎・弘道館教授としての

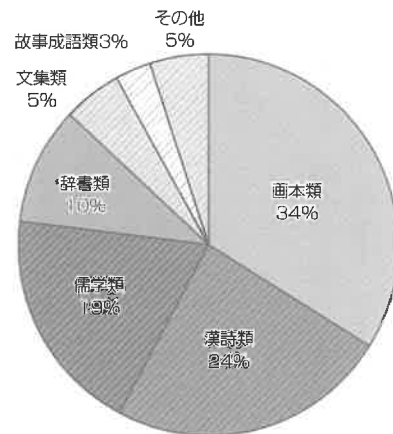
当時の役割としての必要性がうかがえる。また、文人草場佩川としては、絵画・漢詩類の作品数の割合から佩川の知的好奇心を示す割合とも考えられるのではないだろうか。

また、入手時期がはっきりしているものを年表に当てはめると表①のようになる。漢詩については、少年期（寛政）から二十五歳まで毎年入手し、それ以降は記録がない。二十五歳というところ佩川が、対馬にて朝鮮通信使と詩唱や書画で交流を行った年である。一方、画本は、佩川が十九歳（文化二・一八〇五年）から三十二歳（文政元・一八一九年）

【グラフ①】 冊数による内訳



【グラフ②】 作品数による内訳



【表①】 蔵書入手年表

| 佩川年齢 | 西暦   | 画本 | 漢詩 | 故事成語 | 辞書 | 儒学 | 文集 |
|------|------|----|----|------|----|----|----|
| 14   | 1800 |    | 3  |      | 2  |    |    |
| 15   | 1801 |    | 3  |      |    |    |    |
| 16   | 1802 |    | 3  |      | 1  |    |    |
| 19   | 1805 | 2  | 2  |      |    |    |    |
| 22   | 1808 | 1  |    |      |    |    |    |
| 23   | 1809 |    | 16 |      |    |    |    |
| 24   | 1810 | 7  | 8  |      |    |    | 5  |
| 25   | 1811 | 2  | 8  |      |    |    |    |
| 26   | 1812 | 3  |    |      | 1  |    |    |
| 27   | 1813 | 1  |    |      |    | 6  |    |
| 28   | 1814 | 3  |    |      |    |    |    |
| 29   | 1815 | 1  |    |      |    |    |    |
| 30   | 1816 |    |    |      | 42 | 4  |    |
| 32   | 1818 | 2  |    |      |    |    |    |
| 33   | 1819 |    |    | 2    | 4  | 5  |    |

までほぼ毎年入手が始まり、その他の書籍については、所々で入手しており、一定期間購入ということはない。年代が記録されていない書物もあるが、断言できないが、朝鮮通信使との交流が、佩川の漢詩に対する「学ぶもの」から、「創るもの」に変化したのではないかと考えられる。

以上、新蔵書目と画本の目録から佩川の研究や興味・関心のある分野、年齢による変化を見てきた。今後は、佩川日記等をさらに分析し、彼の人物像に迫っていききたい。

【参考文献】  
三好不二雄監修・三好嘉子校註解題『草場佩川日記（上）』西日本文化協会、一九八〇年

## 祖父、大塚巳一という人

細川 章



祖父大塚巳一

一は明治二年  
(一八六九)十

一月十八日、多

久町東の原聖

堂小路の中等

西側に位置す

る、西小路の大

塚家で、父良一

郎二十歳・母ツセ(又は津勢)十八歳の長男として生まれた。良一郎は多久家臣武藤久兵衛の次男で、嫡子のいなかった大塚八左衛門頼忠の一人娘ツセの婿として入った養子である。生年が丁度己巳の年に当たったので、巳一と名付けられた。

父良一郎は、たまたま戊辰の役が終結して、従軍を解かれ、多久へ帰っていたが、激動する時世の波に押し出されるように、新しい学問への衝動押さへがたく、翌明治三年恩師である久米邦武の後を追って、養父母には無断で上京。邦武の推挙により、藩主鍋島直大の侍講となり、更には漢学のみでなく英学の研鑽にも努めた。明治四年十一月二十八日には、福沢諭吉が創設した洋学塾として知られる「慶応義塾」にも、多久寛三郎(当主茂族の四男)・高取生三郎(当時は節之助、後伊好)らの後を追って入塾している(「慶応義塾入社帳」第三)。

ところが邦武は父の病により一時帰国するので、その後は多久家の屋敷に入り、高取生三郎と共に嗣子乾一郎の学友として河田蕪江(後の東京大学教授)

の塾で英・漢の学に励んだという。しかし生活は苦しかったようで、佐賀出身の石丸安世らの斡旋により北海道開拓使に奉職するが、病を得て間もなく辞職。以後は「石丸塾(経倫舎か)」で幼年者に英語を教えていたそうである。

ようやく病が快方に向いた為工部省に採用され、神戸の鉄道寮に勤務したものの、再び病の悪化により又も辞職。この時、短期間ではあるが郷里多久に帰って、病氣療養をしたと伝えられている。巳一は既に九歳になっており、生後間もなく家を出た父を、この時初めて父親として意識し、確認する事が出来たのだそうである。

故郷という環境と、妻の行き届いた看護は良一郎に小康をもたらしたが、明治十一年十一月には再度の工部省出仕を命ぜられ、長崎出張所勤務となり、持病を労りながら英語通訳の任に当たる事となったが、これも翌年には病状の悪化で、八月十八日帰郷せざるをえなかった。そして十三年四月二十三日逝去したのである。享年三十二歳であった。死の数日前に、良一郎は後に残すただ一人の息子巳一を病床の枕元に呼んで「大きくならたら、何になるか」と尋ねたそうである。巳一はすかさず大きな声で「勉強して弁護士になりたい」と答えると、父は寂しそくに「三百代言か」と呟いたという。十二歳の時であった。巳一はこの時の父の顔を終生忘れる事が出来なかつたと、後によく周囲の者たちに語っていた。新しい時代の学問を志しながら、宿痾に侵されて挫折せざるを得なかつた良一郎は、その夢を息子

の巳一に託したかっただけではなからうか。でもそれは江戸時代ならともかく、新しい文明開化の波に乗る為には、この辺境の地多久を出なければ叶わないのである。巳一は未だ年若い母と、祖父母によって育てられていた。ただ一人の孫である巳一を「みいちゃん、みいちゃん」と溺愛していた祖父母は、巳一が他郷に勉学にでる事を決して許さなかつたのである。幼い時から儒学を学んでいた巳一にとって、母・祖父母への孝養は鉄則であった。

さて余計な事とはおもしろいながら、祖父の幼時をここまで克明に記したのは、老年になった祖父が自分を省み、深く慚愧した思いの中に、これらの事が原点として刺のように心中深く突き刺さっていたのを、晩年の祖父を知る私は気付かされていたからである。

当時多久で受けられた教育は、知新小学校・上等小学校・変速中学校(途中、明治十五年五月から「丹邱義学」となる)を終了し、「丹邱義塾」に入り、佐賀の琢磨種貞の塾で数学を習い、多久の鳥越剛儀から漢学の教授を請うという処まで位であった。しかし明治十八年に多久高等小学校が新設されるので、更にそれらを経て、十八歳(明治二十年)には多久小学校の代用教諭になった。のちに妻となる福地ミシ(美志、結婚後アツ)はこの頃の教え子である。この後祖父は、多久を動かさずに勉強出来る方法を選んだ。つまり通信教育である。先ず明治十九年「東京学館」館外員となり英語を学び、翌二十年には「私立専修学校(のち専修大学)」で国法・英米法を、と、同三十五年まで八校をそれぞれ修了し、他に政治・経済をも学んでいる。一校が二年から四年掛かっているので大変な努力であったと思われる。その上漢学については一層の必要を感じたからであろうか。



大正八年から同十一年まで改めて「二松学舎」漢文講習会に入会、十二年から十四年まで「二松学舎」舎外学生として漢文学を研完したとしている。四十九歳から五十五歳に至る、既に晩年にかかつての精進であった。

明治二十三年、勤務する学校の農閑期に「農事休業」を取って、同じ校員の船津俊郎と共に初めて上京している。父良一郎が家族を放り出してまで出奔した東京という都会は、恐らく祖父にとって魅惑に満ちた夢の都であったに違いない。この六月八日の出発から七月四日帰着までの旅行を「東京土産」の一冊に纏めている。その緒言に「予ガ学友ハ大半東京ニ遊学セシモ予ハ己ムヲ得ザル事情アツテ其ノ行ヲ果タサズ」と書き出して「口タ名所古跡ヲ遊覽シ、学友知己ノ留学スルモノノ安否ヲモ問ハン」とその目的を示している。二十歳の時であった。しかしこの時点では、学問に関する執着はそれ程強くは無い。翌二十四年春母ツセが亡くなっているが、勉学への傾斜に凄まじいばかりの執念を募らせたのはこの頃からである。

その経歴に付いて祖父はノートに細かく書き記しているが、ここまでは主な事のみ簡単に述べる事にする。政治的には明治三十年に多久村選出の小城郡郡会議員に初当選。あと多久村村会議員・郡会議員を繰り返し、大正二年には佐賀県県議會議員に当選。所属としては初め立憲改進黨に加盟していたが明治二十九年解党したので、同年佐賀の武富時勲・多久の西英太郎らと、大隈重信の後援を受けている進歩党（明治三十一年自由党と合同して憲政党となり、同四十三年には立憲国民党に合流）に属して同党の評議員にも選出され、選挙のある時は随分激しく動き回っている。中でも明治四十一年・四十五年の衆

議院議員選挙に付いては運動日誌をも認めている。また個人日記も明治三十六年以後のものが、幾らか欠けているものの、未だ相当数残っているものでその辺りを多少は窺う事が出来る。

また明治三十八年から四十四年にかけて「西肥日報」社員として新聞記者をも務めていた。

多久に於いても村会議員の他に幾つかの役目を担っているが、大正十年からの「多久聖廟保存会理事」、同十三年からの「多久図書館監理委員」などは晩年期生涯の仕事として関わり深いものであった。中でも図書館は昭和二年、村長から初代館長を委嘱され、同五年には、改めて佐賀県から館長を任命されている。月手当て五円であった。これは同二十一年、太平洋戦争での教育上の責任を取って辞任するまで続いた。反面、聖廟については、社会が日本人の教養の底流となってきたとされる儒学への反発から非難され、時として「焼き払い論」まで出る中で、一貫して保護の立場を取った。当時八十歳近い老人が、二十年位前から視覚も不自由であったにも関わらず、夜毎に夜警に立った程である。また戦後の混乱の中で、数人の同志を語らって献詞を続け、細々ながら積業を支えた。

「積業献詞」は明治十五年、十二歳から八十歳で亡くなるまで、忌諱に触れる年を除いてほぼ毎年呈出してはいる。

明治末期ごろから孔子に関する図書の蒐集を始めているが、その集積に本格的に鋭意集中するのは、母亡き後、明治三十五年祖父頼忠を、同四十四年祖母トミを喪つてからが最も顕著に窺われる。この集書は昭和二十五年に亡くなる寸前まで続いた。

大正八年三月は祖父が「多久聖廟沿革」を上梓した年でもある。またもう一つの著書「孔夫子の一生」は同十三年一月に刊行している。孔子廟に心血を注

いで行くのもこの辺りからである。こうした孔子廟への熱い関わりの中に、儒学の学徒としての自認だけでなく、祖父にはもう一つ心情的な思い入れがあったようである。それは小さい時から体の割には頭が大きく、頭頂が丘のように高く、真ん中が窪んでいた。孔子も同じだそうで、だから「丘」と号したと言う。孔子廟の近くに住んでこの「丘」を共有する親近感が、学問と融和して祖父を導いていったのかも知れない。

また郷里の歴史に就いても感心があつたようで、旧領主多久家を訪れては「水江事略」「丹邱邑誌」「肥陽旧章録」「御屋形日記」などを読破して、主要な部分は手写している。当時多久氏は男爵で、祖父はその屋敷管理の評議委員をしていたそう、貴重な古文書閲覧にも便宜があつたのであろうか。更に丁度神戸市役所を退職して帰郷した従兄柴田勝峻を語らって、この

膨大な古文書の中からテーマを立てての手写による、史料集作成にも努めていた。その手写史料は今日も残っている。有志の者と「旧多久邑史談会」を発足させ、郷土に関連ある小冊子を作成するようになったのもこの頃である



▲大塚廟山屋敷

うか。昭和六年にはメンバーの共著として、「旧多  
久邑人物小誌」を刊行している。他にも史跡・記念  
碑の類いにも興味があったようで、幾つかの碑の建  
立計画書が残っている。その一つ大正十二年十月二  
十一日に除幕した下鶴の「兵糧小路旧趾碑」は碑文  
を草している。

現在も多久聖廟前に聳える楷樹の、多久移植に関  
わり深い鹿児島造士館(第七高等学校)教授山田準  
氏との出会いは、大正十年春の積菜から祝者(この  
役も亡くなるまでやっていた)を務めた事から、聖  
廟を仲介しての交友のようである。期日はハッキリ  
しないが、同十二年六月の祖父の日記には、先の山  
田準から紹介された造士館長渡部董之介(号稲水)  
からの、楷樹に付いての来信が記されている事から、  
その少し前ぐらいからではないかと思われる。

第七高等学校造士館の校庭にある二本の楷樹のう  
ち一本が、多久聖廟の境内に移植を受ける事が出来  
たのは、同十四年三月九日であった。この日の祖父  
の日記には「林学博士白沢保美ヨリ聖廟へ寄贈ノ楷  
樹ヲ聖廟門内ニ移植シ、針金ヲ以テ外囲ヲ為ス」と  
ある。造士館長渡部董之介の記録によれば、楷樹は  
鹿児島林業試験場の白沢博士が中国曲阜の孔子の墓  
に参詣した折り、墓のほとりで種を拾い、帰国後播  
植して育てた二本を、大正十一年造士館校庭に植え  
たが、請われてその内の一本を佐賀県多久聖堂に  
贈った、とされている。この時の館長渡部董之介の  
手紙も現存している。

翌十三年になると山田準と祖父の交際は密度を増  
し、漢詩・書簡の「やりとり、図書の交換だけで無  
く、幾度か宿泊にも来ていた。その頃積菜には全国  
各地から、漢学に興味を持つ人々の参観が目立つよ  
うになっていた。祝者の祖父は、そうした人達に好  
んで話題を提供し、漢学・漢詩の友としての広く好

誼を結ぶ人達も増えていった。中には塩谷温(しおのやゐん)(東京  
帝国大学教授・斯文会理事)のような著名な学者も  
多く、よく祖父の家に泊まり名物の多久饅頭を食べ、  
多久への賛歌を残していった。漢学者ではなかった  
が、俳人の青木月斗が来た時の「あんなきの 多久  
まんじゅうは 涼しけれ」の句などは、機嫌のいい  
時によく口遊んでいた。

祖父には四男二女の子供がいた。次女サチの長女  
が私である。多久の土を初めて踏んだのは小学校四  
年で、十一歳の昭和十年晩夏の頃であった。祖母が  
亡くなって、眼の不自由な祖父の為に、兄弟妹会議  
を開いて、夫を亡くして身軽だった母に、白羽の矢  
が当たったからである。東多久駅までタクシーを  
伴って、私たち母子三人を出迎えてくれた祖父は、  
青い麻の帷子に紺の袴を付け、白足袋に畳表の草履  
を履いて、ステッキをついていた。小柄で(身長百  
五センチメートル位)細身の体の何処から出てく  
るのかと、飛び上がる程大きな声であった。既に六  
十七歳の祖父の頭はすっかり禿げ上がり、白い鬚(ひげ)  
(私たちは後に山羊髭と言うようになった)を蓄え  
ていた。

私にとって、祖父にはあるわだかまりがあった。  
それは私が生まれて名前をつける時、童子と父母が  
きめたのを、「子は尊称であるから自分の子供に用  
いるべきでは無い」と忠告され、子を外されてしまっ  
た経緯がある。男子と間違えようがないこの名のために、  
学校でどんなに苛められた事か。

その頃祖父の言葉で引つ掛かったのは、東京をト  
ウケイ、読書をトクシヨと言った。私たちとは異なっ  
た発音をする事だった。ある日はラジオが「覆面を  
フクメンと言った。あれはフウメンがほんなこと」  
などと言う。後で聞くと、漢字の音読みは漢音が正  
しいのだと主張していて、呉音読みを許せなかった  
のだそうである。

どちらかと  
言えば気難し  
い人だった。

久し振りに帰  
郷した息子と  
いえども、書  
斎の敷居を跨  
がせない、食  
事は何時も書  
斎で一人で食  
べる、家にい  
る日は赤い煉  
瓦の書庫に入  
って、本を

読むか書き物  
をしている、  
といった家庭  
の祖父は、  
独裁者で家族  
の情愛など省  
みない冷たい  
人に見えた。

しかし私たち  
姉妹には何か  
しみじみとし  
た温かさが  
あった。あれ  
は弱者に對す  
る優しさだっ  
たと思う。私  
たちは、この  
勞りの中で何  
も不自由なく  
成長する事が  
出来たのだっ  
た。早くに父  
を喪った私た  
ちの痛みを、  
祖父は自分の  
幼い頃にぞら  
えていたのか  
も知れない。

昭和二十二年  
秋私は病を得  
て、婚家先か  
ら生まれ半  
年になる娘を  
連れて、再び  
多久に帰った  
。涙を浮かべ  
て迎えてくれ  
た祖父は、戦  
後の混乱の中  
で随分やつれ  
たように見え  
た。聖廟保存  
で胸を痛めて  
いた頃であっ  
た。それに「  
農地改革」「  
預貯金封鎖」  
という生活を  
根底から覆す  
ような問題も  
起こっていた  
。それでも平  
然と肩を怒ら  
せていた。母  
が「空意地張  
って」と首を  
すくめて見せ  
た。それでも  
、時に大きな  
声で漢詩を吟  
ずるのが、書  
斎の方から聞  
こえてくる。私  
たちは何となく  
安堵したのだ  
った。

昭和二十五年  
春彼岸の中日  
に、突然祖父  
はなくなった  
。脳卒中であ  
った。書斎の  
机の上には「  
仁の



▲大塚廟山 墓碑(多久町 専称寺)

研究」が読みさしてあった。

その後あの煉瓦の書庫に残った夥しい図書を曝書するのは、病癒えて司書の資格を取り、祖父が二十四年間勤めた多久図書館に職を定め、三度多久に帰ってきた私の仕事になった。煉瓦の書庫は祖父の号を取って「廟山書屋」と名付けられていたので、私たちはこの文庫を「廟山文庫」と呼ぶことにした。文庫は思いがけなく九州大学の荒木見悟教授のお目にとまり、そのご紹介からまた多くの研究者、著名な先生方の訪問を受けるようになった。

中でも祖父とも関わりの深い二松学舎の、浦野匡彦学長・中田勝教授の来訪には感銘深いものがあつた。また岡田武彦九州大学名誉教授は、文庫の蔵書の中から雑誌「陽明学」の刊行という、大型本四冊に及ぶ大変な仕事を手掛けて下さった。他にもこの文庫の縁で私は沢山の素晴らしい師と仰ぐ事の出来る方々に出会えた。

その後、文庫は嫡孫である従弟大塚博比古によって多久市に寄贈された。現在「先覚者資料館」の一室に、他の関連資料と共に配架されている。古き時代の日本の地域の教養人の、一つの典型的な蔵書としてひっそりと、しかし熱っぽく、何かを今日の私たちに語りかけているように見える。

(細川章さんの三回忌の日に、長女文子さんより母の原稿がありますが無かに使えますか。と預かった物だが、平成七年多久市郷土研究会の会報「丹那の里 十四号」に掲載済みの原稿だった。郷土研究会の許可をいただきここに再掲します。)

## 肥前国多久邑八景詩紹介（其の三）

### 八幡晨鐘

|         |         |           |
|---------|---------|-----------|
| 隱々穿雲欲曙時 | 隱隱タル穿雲  | 曙ケント欲スルノ時 |
| 儼然靈廟遺跡垂 | 儼然タル靈廟  | 遺蹤ノ垂ル     |
| 樓鐘伝響残星散 | 樓鐘響ヲ伝ヘテ | 残星散リ      |
| 神徳含光映白旗 | 神徳光ヲ含ンデ | 白旗ヲ映ズ     |

諸官快堂 林信允士僖甫

### 八幡晨鐘

|       |             |
|-------|-------------|
| 高臥不知曉 | 高臥シテ曉ヲ知ラズ   |
| 鐘声遠聴聞 | 鐘声遠ク聴聞ス     |
| 宮雲廻北斗 | 宮雲ハ北斗ヲ廻ラシ   |
| 祭爛已成文 | 祭爛トシテ已ニ文ヲ成ス |

経筵講官 林信智艸



## 鍋島直茂公・勝茂公の藩づくり

公益財団法人鍋島報效会 徴古館主任学芸員

富田紘次

討ち捕え、則ち明智一類共  
残らず首を刎ね」と、本  
能寺の変から山崎の戦いに  
至る近況を伝える。そして

諸式如在無きよう覚悟せしめ、忠節専用  
に思召し候なり」とあり、龍造寺政家と  
並んで直茂にも期待がかけられていた  
様子がかがわれる。この時、病と  
称して重い腰を上げようとした政家とは  
対照的に、早くもその翌月に直茂は、「肥  
後国に至り早速相動き…(中略)…ことごとく  
誅伐せしむる事、感じ思召し候。まことに  
粉骨の段比類なく候」という感状を秀吉  
から受けている。<sup>(3)</sup> やがて天正十八年  
には「直茂公いよいよ国事を勤めらるべき  
旨台命あり」、その一方で「政家公御家督  
の儀は、藤八郎殿(高房)へ仰せ出さる  
なり」<sup>(4)</sup>、すなわち領国経営を直茂が進める  
方向が一層固まる一方で、政家は三十五歳  
で隠居を命じられ、家督はわずかに「御歳  
五歳」の高房が継いだ。二年後に始まる  
朝鮮出兵に際し、龍造寺家臣団を率いる  
よう、秀吉からの動員命令を受けたのも  
直茂だった。<sup>(5)</sup>

やがて文禄四年(一五九五)、直茂の子清茂は「大  
閤の台命を以て従五位下に叙され、信濃守  
に補任あり。勝茂と御改名」し、秀吉養女  
(実は戸田勝隆の娘)を娶り、大名嗣子  
としての扱いを受けた。その翌年、龍造寺  
家晴や龍造寺家久(多久安順)ら龍造寺家  
の有力家臣十五名は、勝茂に次のような  
起請文を提出した。<sup>(6)</sup>「藤八様(高房)・加  
賀守殿(直茂)御芳恩を以て、身上今に相  
続し候事、その節忘却無く、吉凶は鍋嶋  
信濃守殿(勝茂)御下知に随い候」。この  
とき五十九歳の直茂は大いに安堵した。

肥前の戦国大名龍造寺氏は、隆信(一五二九  
八四)の時代に領国を最も広げ、豊後の大友  
氏・薩摩の島津氏と並び九州を三分する勢  
だった。ところが、隆信は天正十二年(一五  
八四)に戦死。家督は子の政家が継ぐ一方  
で、国政は隆信のもとで武功を重ねていた  
義兄弟の鍋島直茂(一五三八一六一八)が  
リードする。やがて豊臣秀吉や家臣団から  
の信望を厚くした直茂は、佐賀藩主として  
の鍋島家の地歩を固めたことから「藩祖」と  
呼ばれている。その直茂が元和四年(一六  
一八)に没してから、今年(平成二十九年/  
二〇一七年)で四〇〇年にあたる。本稿で  
はいくつかの鍋島家伝来資料を通じてその  
概略を辿りたい。

「南蛮帽子送り給い候、祝着の至りに候」と、南蛮帽子を贈呈してくれた直茂への謝辞で結んで  
いる。秀吉は山崎の戦いにより信長の後継者の地位を  
ひとまず築き、天下統一への道を進むこととなる。その過程で秀吉が九州に進攻し、島津氏を降伏させ九州の争乱に終止符が打たれるのは天正十五年のこと。その五年も前に、龍造寺隆信の最盛期にあたる天正九十年という時点で、その家臣である直茂が秀吉によしみを通じたことが、隆信の指示なのか、直茂独自の働きかけなのかは分からない。ただ、文中に「龍造寺」の名は一切見えない。この書簡のサイズは、高さ約十cm・横幅約五十cm。巻き上げると、幅はわずか三cm程度となる。こうした内容と形状の面からこの書簡は密書と言われている。

天正十年(一五八二)、京都で明智光秀が織田信長を襲い自殺させた本能寺の変は日本史上著名な出来事である。またこのとき、備中高松城の毛利氏を攻撃中だった豊臣秀吉が急いで京都に上り、山崎の戦いで明智光秀を討つたこともよく知られている。そのわずか一ヵ月後、秀吉はこの一連の出来事を佐賀の鍋島直茂に書簡で知らせている。<sup>(1)</sup>

その冒頭、秀吉は「仰せの如く去年のころ示しに預かり候」と述べ、すでにこれ以前にも直茂を通じていたことを確認している。そして「京都不慮につきて毛利…(中略)…和睦せしめ、馬を納め、則ち京都へ切り上り一戦に及び、即時に切り崩し三千余

この書簡から二年後、隆信は五十六歳で戦死。家督を継いだ子の政家はこの年、直茂に宛てた起請文のなかで、「今においても親子・兄弟のようにならば何事もなく申し承るべく候」と述べ、領国経営において直茂に積極的意見を求める態度を示した。<sup>(2)</sup> 秀吉が九州を平定したのはその三年後のこと。平定直後、肥後熊本には領主として佐々成政が入ったが、その領国経営ぶりに対し不満を抱いた国人らが一揆を結び蜂起した。これを耳にした秀吉は九州諸將に鎮圧を命じたが、このとき龍造寺政家や鍋島直茂も秀吉からの動員の指示書を受けている。直茂宛ての指示書には「龍造寺ならびに其方(直茂)事、

堵した。

堵した。

堵した。



後世、直茂の残した言葉の数々は「御壁書二十一ヶ条」としてまとめられ、佐賀藩士に広く読み継がれた。その一節に「身上の届けは、昇橋のほるように」という言葉がある。二十一ヶ条を「当国士民の真宝」と捉えていた江戸時代前期の儒学者石田一鼎（一六二九〜九三）はこの言葉について、「第一の下段より役儀を勤めて段々に勤めて上る時、諸人もその徳を信じ、国家の棟梁とも成るなり。昇橋とは、このことなり」と解説している。<sup>(7)</sup> 昇進というものは、梯子を一段ずつ登るように着実にしなければ、周囲からは認められないという。龍造寺隆信・政治家・高房のもと、その領国を支えてきた直茂の姿が滲む。

やがて慶長十二年（一六〇七）に龍造寺高房は逝去。これを受けて、江戸に召喚され龍造寺家の家督相続の適任者について諮問を受けた多久安順らは、「鍋島加賀守（直茂）事、家督を相続仕るべき者に候：（中略）：さりながら加賀守は年寄に罷り成りつれば、嫡子信濃守（勝茂）を惣領に」と答申し、<sup>(8)</sup> これにより同年、勝茂は初代佐賀藩主となり、名実ともに佐賀藩主鍋島家が成立した。

（参考文献）藤野保編『佐賀藩の総合研究』吉川弘文館、昭和五十六年

(1) 「鍋島直茂宛て豊臣秀吉書状」天正十年（一五八二）七月十一日付、公益財団法人鍋島報効会所蔵／『佐賀県史料集成』第三卷「鍋島家文書」第二号

(2) 「龍造寺政治家起請文」（「直茂公譜考補」蓮池御入城場所引）公益財団法人鍋島報効会所蔵（鍋一一三一―一四）／『佐賀県近世史料』第一編第一卷、佐賀県立図書館、平成五年

(3) 「豊臣秀吉朱印状」天正十五年（一五八七）十二月二十七日付、公益財団法人鍋島報効会所蔵／『佐賀県史料集成』第三卷「鍋島家文書」第十三号

(4) 「直茂公譜」天正十八年（一五九〇）三月七日条、公益財団法人鍋島報効会所蔵

(5) 「高麗渡海陣立書」公益財団法人鍋島報効会所蔵／『佐賀県史料集成』第三卷「鍋島家文書」第〇三〇号

(6) 「龍造寺周光等十五名連署起請文前書案」（「多久家 有之候御書物写」所収）公益財団法人鍋島報効会所蔵・佐賀県立図書館寄託（鍋〇一五一―一〇）／『佐賀県史料集成』第十卷、第七十三号文書

(7) 「御壁書二十一ヶ条其外」石田一鼎編、公益財団法人鍋島報効会所蔵・佐賀県立図書館寄託（鍋〇六三―一〇）／『佐賀県近世史料』第八編第三卷、佐賀県立図書館、平成十九年

(8) 「勝茂公譜考補三乾」所引「福地家記」、公益財団法人鍋島報効会所蔵・佐賀県立図書館寄託（鍋一一三一―一〇）／『佐賀県近世史料』第一編第二卷、佐賀県立図書館、平成六年

## 第1回 多久百景写真コンテスト表彰式

ご応募いただいた皆様、まことにありがとうございます。応募総数300を越える作品から、みごと第1回のグランプリに輝いた写真をはじめ、入選作品の展示も行います。

日時 平成29年10月22日（日）  
12:00～12:30  
場所 多久聖廟展示館横

## 多久聖廟 秋季積菜・孔子祭のご案内

日時 平成29年10月22日（日） 10時～13時10分 場所 多久聖廟

- |            |               |            |
|------------|---------------|------------|
| ① 執事・伶人 入場 | 10時00分～10時20分 | （聖廟参道）     |
| ② 献官・祭官 入場 | 10時20分～10時30分 | （聖廟参道）     |
| ③ 積菜（せきさい） | 10時30分～11時30分 | （聖廟内）      |
| ④ 積菜の舞     | 11時30分～11時45分 | （聖廟境内）     |
| ⑤ 参列生徒の唱歌  | 11時45分～11時50分 | （聖廟境内）     |
| ⑥ 幼児太鼓     | 11時50分～12時00分 | （聖廟境内）     |
| ⑦ 花棒舞      | 12時10分～12時20分 | （聖廟イベント広場） |
| ⑧ 孔子の里腰鼓   | 12時20分～12時35分 | （聖廟イベント広場） |
| ⑨ 積菜の舞     | 12時35分～12時50分 | （聖廟イベント広場） |
| ⑩ 獅子舞      | 12時50分～13時10分 | （聖廟イベント広場） |

※諸事情により予定を変更する場合がございますので、あらかじめご了承ください。

# 《儒林》

多久では先覚者・先賢を儒林と呼んでいる

いしまるきほう  
**石丸亀峰** (一七三五～一八二二年)

石丸家は代々多久家の家臣であり、元亀元年(一五七〇)に龍造寺長信が梶峰城入城の時に従った士七十五名、士卒合わせて五百余名と伝えられる家臣の中の一人である。水ヶ江龍造寺家(後の多久家)に仕えた家臣たちの由緒を編集した『水江臣記』には、

「某先祖石丸丸右衛門儀、天理様多久御入城之御共七拾五人之内二而御坐候、…」と書き記してある。

姓宇多源、諱良誠(良幹)、自称礼助。屋敷が銭亀山(亀峰)に面していたので号を亀峰としたと伝えられる。

石丸亀峰は石井鶴山と並び称される江戸中期の多久が生んだ名儒である。幼くして父良賢の教えを受け、邑儒原浄忠(原花村)の門に入り、東原庵舎に学び、未だ二十歳を前にして東原庵舎の都講(塾頭)となり学舎の経理事務も兼ねた。京師に遊学し、徂徠学を学び、東原庵舎の教諭に任じられ、諸生に教えること二十余年に及び。四十歳を過ぎてから再度京都に遊学し、諸名家を訪ねて程朱学の研修を重ねて帰邑の後、天明四年(一七八四)、五十歳の時に禄高百石を賜って本藩に召し抱えられ、藩校弘道館の国学教諭となる。弘道館では修業館九思堂で小学児童の句読を担当していたが、寛政八年(一七九六)、

教授古賀精里が幕府昌平校の儒官に任ぜられて江戸へ赴くに当たり、教授職を代行し二十五石を加増された。

「佐賀藩弘道館記録」寛政八辰には、

「今日(正月六日)開講、扱又六芸始其外左之通、刻限朝五半時、

一 白鹿堂開講 講師 石丸礼介」

寛政八年の年始の講義に壁書白鹿堂書院掲示の講義を行った記録があり、さらに、

「(三月廿二日)教授古賀弥助 公儀御用二付、今日委許出立、江戸被罷登候」

「(七月六日)石丸礼介教授被仰付、此御方御勤二付而者、昼間修業館指南方差明申候条…」

「(七月廿日)高楊忠助助教被仰付候、座位之儀、…」寛政八年三月二十二日に古賀精里が昌平校の教授として江戸へ出立、七月六日に亀峰が教授に、二十日には高楊忠助(号浦里)が助教に昇任したことが記録されている。

亀峰は体格や顔つきが人並み外れて大きく逞しく、人柄は喜怒哀楽を面に出さず、人と接するにも外見を気にせず、常に学問に専念され規範倫理観が強く、経を講じられる時の弁舌の優れている様は人々に広く周知され名声を得ておられた。先生は学問に秀でて居られた上に、姉川の槍術を善くせられたので、歩兵隊長となりて、職に居られること前後三十余年であった。

残念な事には、詩文集や著書など少なからずあつたが尽く水難に遭って漂失した。と『先哲叢話』にある。

文化九年(一八一二)二月十八日病没。享年七十八歳。妙安寺に葬られた。

文献で最も古い『丹邱邑誌』には諱「良誠」となっているが、他の文献には「良幹」と記されている。墓碑文の確認に佐賀市の妙安寺を訪ねた。

曹洞宗泰祐山妙安寺は、戦国の世にあつて波乱の生涯をおくった村中龍造寺家十八代胤榮の娘、阿安(於安・秀の前・妙安尼)が葬られた由緒ある寺である。ご住職様に懇願して墓碑の調査を行った。昭和二十年八月の佐賀空襲で被害を受け、平成十七年に周囲の道路拡張工事で改修された寺は美しい山門と白塀に囲まれて墓地は整然と整えられていた。猛暑日の中、総ての墓碑を見て歩いたが、石丸家の墓は一基、しかも昭和初期に建立されており、亀峰に関する痕跡を見いだす事は出来なかった。(服部政昭)

## 【参考文献】

『丹邱邑誌』深江順房撰(一八四七年)／多久古文書の村、一九九三年翻刻

『舊多久邑人物小志』(舊多久邑史談會、一九三一年初版)／多久町懇話会、一九七九年再版

『佐賀先哲叢話』中島吉郎著(一九〇二年初版)／伊東祐毅、一九一三年再版

『多久市史』人物篇(多久市、二〇〇八年)

『佐賀県教育史』資料篇(一)(佐賀県教育委員会、一九八九年)

『近世藩校に於ける学統学派の研究 下』笠井助治著(吉川弘文館、一九七〇年)



▲聖堂小路から望む銭亀山

# 来訪・来信・雑識

来訪・来信・雑録

- 3月31日～4月3日 中国山東省曲阜「儒学国際シンポジウム」参加(横尾理事長、服部常務理事、趙勇)
- 4月7日 多久聖廟春季積菜委員会
- 4月10日 杏壇句碑建立
- 4月18日 平成二十九年多久聖廟春季積菜
- 4月22日～24日 NHK『アサタビ』取材
- 5月9日 公益財団法人理事会
- 5月10日 公益財団法人評議員選定委員会
- 5月25日 公益財団法人評議員会
- 6月1日 西松浦郡有田町 同朋保育園園児 聖廟で素読
- 6月6日 古文書講座
- 6月17日 「鶴山塾」
- 6月24日 「鍋島直茂公・勝茂公の藩づくり」(公益財団法人鍋島報効会徴古館主任学芸員・富田紘次)
- 7月4日 佩川の「婆心帳をよむ」講座
- 7月15日 古文書講座
- 7月13日 佩川の「婆心帳をよむ」講座
- 7月29日 諸田賢順を偲ぶ会
- 8月1日 「鶴山塾」名儒 石井鶴山(公益財団法人鍋島報効会役員・大園隆二郎)
- 8月12日 古文書講座
- 8月17日 ジュニアガイドと田澤少年クラブ(鹿島市・田澤義輔記念館)との交流会
- 8月17日 ジュニアガイドと博愛少年団(佐賀市・佐野常民記念館)との交流会
- 8月17日 公益財団法人孔子の里芸能保存会総会
- 8月19日 「鶴山塾」多久と有田皿山(有田町歴史民俗資料館館長・尾崎葉子)
- 8月26日 佩川の「婆心帳をよむ」講座
- 9月5日 古文書講座
- 9月20日～23日 通学合宿
- 9月27日 東原庫舎防火訓練

9月30日 佩川の「婆心帳をよむ」講座  
 10月2日 多久聖廟秋季積菜委員会  
 10月3日 古文書講座

山々に囲まれた緑豊かな多久聖廟・寒鷲亭など。佐賀ののんびり気ままなぶらり旅が思い出深い旅となり、未だ余韻に浸っております。  
 (広島市、伊藤知子)

この度の佐賀の旅はお陰様で多久の景色も人との出会いも心に残る心温まる旅となりました。また、機会を見つけて訪ねたいと思います。桜と麦の美しい頃に。  
 (広島県府中町、川崎芳枝)

先日は楽しいひと時をありがとうございました。二度目に訪れた孔子の里で思いもかけぬご縁に会う事ができ、とても嬉しく存じました。可愛い三人のお嬢さんの一生懸命に説明してくださるお姿に感動致しました。自分達の生まれ育った地に、このように誇れる名所旧跡があることをうらやましく思います。故郷を大事にする気持ちいつまでも忘れないでください。そして身体を大切に、勉強に遊びに励んでください。暑い中、本当にありがとうございました。  
 (福岡市、下川清・明子)

多久市の「孔子の里」を訪ねましたところ、小学生の皆様が歓迎をいただき嬉しゅうございました。郷土の誇りである「孔子の里」を一生懸命に誇りをもって由来を説く姿に感激しました。多久聖廟が守られている源流にふれました。今後とも末永くこの佳き伝統が継続されますよう祈念しています。  
 (福岡県糸島市、山村英治)

## 私の好きな論語



多久市立東原庫舎西溪校2年生 岩本 芽依さん

### 「三人行えば必ず我が師あり」

わたしはいつもこのろん語で友だちのことを思い出します。

べん強がとくいな友だち、あいさつが上手な友だち、絵が上手な友だち。みんなわたしの一ばんの先生だと思います。

わたしもだれかの先生になれるようにいろいろなことがんばりたいです。



多久市立東原庫舎西溪校5年生 中山 裕彩さん

### 「行くに徑に由らず」

私がこの論語を選んだ理由は、苦手なことをするときはずぐに近道をさがして、近道を選んでしまうからです。だから苦手なことをする時はこの論語を思い出して、なにことも近道をさがさず、選ばずにがんばって行きたいです。

## ● 聖廟の森に棲む動物たち ●

### カワセミ

またの名を飛ぶ宝石。背のコバルトブルー、金属光沢の緑の羽根、橙色の胸や腹、大きめの頭とくちばしとくれば美しさに加えて可愛さも十分。バードウォッチングではトップクラスの人気だ。大きさはスズメ大。多久には周年生息。もちろん繁殖もしている。

では見に行こうとなると、おいそれとは姿を見せたくない。それでも多久川に沿ってゆっくり観察すればきつと見つかる。一見派手だけれども岸辺の草ややぶに入ると不思議に見つからない。派手に光が当たらないとカモフラージュの役をしようからだ。

農業用ため池や集落の中の小川にも飛来する。西溪公園でもみたことがあるし、宮城川でもであった。ピーツという声は探す手がかりになる。

(日本野鳥の会 福田 司)



▲カワセミの羽づくろい (下鶴にて)

## ◆ 賛助会員入会の案内 ◆

本法人では、重要文化財多久聖廟及びその周辺に所在する史跡等の保全とすぐれた自然条件との調和のとれた開発を推進し、快適な環境の醸成と、由緒ある文教の地に適応した学芸文化の研鑽振興及び普及を図り、もって地域の活力ある発展に寄与することを目的として活動をしています。

ご賛同いただき、ご入会ご協力をお願い致します。

### ● 会員の種類

個人賛助会員 年会費 一口 3,000円

法人賛助会員 年会費 一口 10,000円

### ● 入会申込み・お問い合わせ

〒846-0031 多久市多久町1843番地3 東原庫舎内

公益財団法人 孔子の里 事務局

電話 0952-75-5112 FAX 0952-75-5320

E-mail ko-si@po.taku.ne.jp

詳細は当財団ホームページを

ご覧下さい。

🔍 孔子の里 🔍 検索

## 公益財団法人 孔子の里 販売物

◇ 論語 日めくりこよみ  
700円

◇ 百人一首式論語カルタ  
2,500円



### 問い合わせ先

公益財団法人 孔子の里 電話 0952-75-5112

当財団HPもしくはAmazonでも販売しています。

🔍 百人一首式論語カルタ 🔍 検索

## 編集後記

先ずは環境整備と、雑木の伐採、下草刈りと、気が遠くなるような作業です。三百年を超えて森を守り通して来られた先人たちのご苦労を知ることが出来ます。

聖廟の森では様々な出会いがあります。タヌキ、アナグマ、モグラ、ホンドギツネ等は東原庫舎の玄關まで散歩に來ます。アオゲラのドラミングも時折森から響いて來ます。今号からは野鳥や動物たちを多久に移住して観察を続けて來られた福田司さん(日本野鳥の会)に聖廟の森の生物を連載していただきます。

賛助会員の入会およびお便りご意見もお待ちしています。(服)



▲頑張る、ジュニアガイド